

# 山川菊栄記念会＊資料部情報

no.1, 2023 年 9 月

---

## 「一枚の写真から」

山田敬子(やまだたかこ 山川菊栄記念会事務局長)

### 要旨

山川菊栄記念会で整理中の写真のうち、写された背景のわからなかった 1 枚が、1955 年に開催された第 1 回神奈川県婦人図書館員研修会の講演に際して撮影されたものとわかった。公私立の司書や職員の女性たちが自主的に立ち上げた第 1 回の研修会は、神奈川県立図書館で行われ、山川が講演したことはこれまで知られていなかったものであり、その要旨が「第一回 神奈川県婦人図書館員研修会記録」(1955 年 12 月刊、神奈川県立図書館蔵)に掲載されていたので、神奈川県立図書館の了解を得て、デジタルテキスト化し採録した。なお、講演録には「文盲率」という障がい者差別に通じることばが使われており、今日では「非識字率」とされるところだが、現代史の資料としてそのまま残して掲載した。

### キーワード

山川菊栄、神奈川県婦人図書館員研修会、女性と読書

---

©山田敬子

この作品は [クリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際ライセンス](https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/)の下に提供されています。引用するときは次の形式でお願いします。

山田敬子「一枚の写真から」『山川菊栄記念会＊資料部情報』no.1、2023 年9月(山川菊栄記念会サイト [https://yamakawakikue.org/archives\\_info](https://yamakawakikue.org/archives_info) 内)), 閲覧年月日

## 「一枚の写真から」 山田敬子



上の写真は、山川菊栄文庫の関係資料として神奈川県立図書館に寄贈するたくさんの写真の1枚だった。何かの研修会で講師は山川菊栄。講演の演題は「婦人はなぜ本を読まないのでしょうか」。次第を書いた黒板の菊栄が菊枝になっているのはご愛敬。午後の協議議題も「婦人の図書館利用はなぜ少ないのでしょうか」「不良出版物と図書館員の立場」となっている。黒板には「神奈川県図」「女子職員」。

菊栄と最後の30年を共に過ごした岡部雅子さんは、この写真の菊栄が「難しい顔をしている」と気にしていたが、いつの記録写真か、調べたいと思いながら10年以上、そのままになっていた。

先日、ふと思ひ立ち、図書館の研究会で一緒のライン仲間に投げてみた。さすがプロ。「神奈川県婦人図書館員研究会」の記録を探し出した。『10年のあゆみ』が県立図書館にあることも調べてくれた。さらに研修会の記録も県立図書館にあるではないか。

そしてまた、山口順子さんが、『10年のあゆみ』が国会図書館のデジタルコレクションの個人送信ですぐに読めることを教示してくれた。

会議は1955年9月24日、県立図書館を会場に行われ、40数名が参加。その年の名簿で女性図書館員72名(市町村立図書館、大学図書館も含む)。

県立図書館で『10年の歩み』とともに、1955年9月の第1回、その後の研修会も更紙の「ガリ版刷り」の冊子として会議の記録が残されていて、実物を手に取ることができた。

山川は、女性が読書をしないのは習慣になっていない、学生時代に読書をしていても制服を脱ぐときにその習慣も脱ぎ捨てていることが多い、良妻賢母教育は終わったはずだが、読書傾向も偏っている。習慣化するためには読書会などの組織化を提案しているとし、1951年から52年にかけてイギリスに滞在した時の見聞と思われるが、ロンドンで見た女性たちの読書サークルを紹介している。

その後、県内で女性たちの読書サークルが積極的につくられている様子が『10年の記録』に記されているが、山口さんは記念会のサイトニュースに以下をアップした。

山川菊栄の略歴ページに、1955年に山川菊栄が神奈川県婦人図書館員研究会の第1回研究会で講演を行った事実を追加しました。講演タイトルは「何故婦人は本を読まないのでしょうか」というもので、家事のため本を読む時間が少なく習慣化されていないと原因を指摘しました。その後、この研究会(通称・女子研)では女性利用者や女性の読書グループを対象とした図書解説目録の作成をめざした活動を開始していきます(同研究会「10年のあゆみ」より)。今日、全国各地にある男女共同参画推進センター図書室に先駆けた試みといっぴよいでしょう。

1枚の写真から、1950年代の女性たちの姿が浮かび上がってきた。以下は毎年作成されていた記録集(神奈川県立図書館蔵)からデジタルテキストとして翻刻した、山川菊栄の講演要旨である。翻刻にはアプリ「テキストスキャナー」を使った。

---

## 山川菊栄「何故、婦人は本を読まないのでしょうか」

### 第1回 神奈川県婦人図書館員研修会議での報告(1955年9月24日)

#### <要旨>

日本の女性は本がよめないのである。欧米に比して負けぬほど文盲率は低い。インド、ビルマ、バルカン諸国などのように各民族が入り混じりそれぞれの言葉を使ったり、他国語を第一国語としているのと異なって、日本では単一の言語で、これをみんなが自由に読み書きしている。にもかかわらず、本を読まないのはよむ習慣を持っていないのではないか。読書は一つの習慣なのだ。字を知っている人達が多く、婦人は勤勉の象徴の様にいわれるが、不思議に家庭に入ってしまうと、本を読む勤勉さを失う。たとえ本をよむとしても、十年一日の如く台所、着物などの本しか読まぬ人が多い。生活をみつめ、正しいものの見方も之では身につかない。読書の範囲が非常に狭く、識ることの関心が薄く、或は成長する子供についていけなくなる婦人のこの状態は過去の女子教育のなせる業である。女子教育で、次の時代を担う人を養う婦人の人としての生き方を考えた人は非常に少なく、次第に学科内容が高くなったにもかかわらず考え方は女は女らしく家を守っていくという良妻賢母式の教育にすぎなかった。本を読むにしても、古典をよむのはいいが、唯それだけで、昔の人の気持から一歩も出ないならば何の役にも立たない。台所の改善にしる、服装の研究にしる、単に技術だけに止まったならば、他方に服もなく、家も、台所も共同で使っている人々どうしてそうになっているかということは一切知らないことになってしまう。物を考えたりする時間のスキマもなく働いていけばいいという生活では、良心的にすればする程、婦人の負担はましてくる。どうして人間的でない状態

になるか、知り、考えるためにも、視野を広げる読書が必要なのである。

近年では、婦人に対する教育は改まり、昔に比べると、衣食住にかかる時間もずっと少なくなっているのに、本を読むことが少ないのは、よむ習慣がないのではないか。制服を脱ぐと同時に読書の習慣も脱ぎ捨ててしまわず、学校を出ても若いうちに本をよむ。時にまとまった本をよむ習慣をつけること、これは日本全体としても注意してよい。青少年の悪書出版にしても、禁止一方ではなくよい本を子供にすすめる。子供の相手になれるだけの読書週間をつける積極性が欲しい。若い女性が結婚したら、未婚時代の理想を追いつづけることが互いに出来、互いに離し相手になれるよういつも向上心を心掛けたいのだ。生活の中から暇を生み出し、その時間で目標をたてて読書向かう。一人でできなければ、みんなの力を借りる。

ロンドンの郊外で、ある婦人団体の主婦たちは、週一回、午後2～4時の間読書会に読書会を持っていた。中年以上の20人ばかりの人々で講師を呼び、一冊の本一丁度その時はラマ・ラウの“インド紀行”(註)一を読み、語り合っていたところをおとずれたことがある。イギリスでは、主婦の会合時間は午後2～4時、勤める婦人は夜7～9時30分まで、未知の世界を求めてそれぞれまとまった本をよんでいる。そして、互いに意見を話し合い、楽しい一刻を過ごしていた。仕事は各自分担し、行届いた共同生活の訓練のさまがみられていた。

読書は結局習慣で、続けるには努力がいる。めいめいでその努力をしなければ、人としての明るい生活は得られないが、一人で行いにくいことも大勢でやれば出来る。読書のよろこびをし、そして習慣をつける読書の集いこそ持たれるべきだ。互に読書会を持つ機会を進んでつける読書の集いこそ持たれるべきだ。互に読書会を持つ機会を進んで作るチャンスを見つけていかれることを望む。

終わって、読書能力、読書会と図書館との結びつきなどについて、活発な質疑応答があり、午前を終わった。(神奈川県図書館協会「第一回 神奈川県婦人図書館員研修会記録」1955.12 発行より)

---

(翻刻註)

この本は、サンタ・ラマ ラウの *Home to India* (「インドへ帰る」) であろう。初版は1945年で、戦前から社会主義思想を広める出版社として知られた、ゴランツ社による赤い表紙のレフトブッククラブのエディションであった。

ラマ ラウは、父親が初代駐日インド大使となったため在日したことがあり、そのとき最初の夫であるGHQのファウビオン・パワーズと知り合うことになる(Wikipedia 英語版による)。その後アジア各国をまわった旅行記を1951年に著わした(*East of home*)。この講演会当時にはすでに、1953年に岩波文庫から『アジアの目覚め』(蠟山芳郎訳)、1955年に新潮社から『インドの顔』(松岡洋子訳)が刊行されており、独立後のインドと日本の国際交流に貢献をした女性であった。なお、山川菊栄は欧州の視察旅行の帰り、インドのコルカタ(当時はカルカッタ)に宿泊した。そのときに矢野邦彦氏と撮影した写真が山川菊栄文庫関連資料に残っている。